

# 上原 美術館 通信

No.01

2018  
2  
winter

編集・発行 公益財団法人上原美術館  
2018年2月発行  
上原美術館  
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341  
Tel. 0558-28-1228  
[www.uehara-museum.or.jp](http://www.uehara-museum.or.jp)



上原美術館ではリニューアル記念展の第2弾として、静岡県立美術館との合同企画展を開催します。

美しいものは人々を旅へといざないます。旅で出会うのは移りゆく景色、古くから愛される文化、そこに生きる人々。そして、それらを通じて旅する人は自らの内なる世界をめぐります。本展は伊豆の平安仏や富士の絵画など、伊豆・静岡ゆかりの美にはじまり、印象派などの風景画や、ジャンルを超えた内なる美の世界を、旅するようにご覧いただく展覧会です。

本展では上原美術館と静岡県立美術館、双方のコレクションが伊豆・下田に集まります。上原美術館は個人コレクションを出発点とした、穏やかで親しみやすい作品群が特徴です。一つひとつの作品には、それらを受したコレクターの優しいまなざしが垣間見えます。一方、静岡県立美術館のコレクションには、東西の風景、富士山、現代美術、ロダンなどをテーマに、多彩で質の高い作品が揃います。それらのコレクションが出あうことで、ジャンルを超えた新しい美の世界が生まれます。今回の展覧会では、こうした美しい世界を旅するように巡っていただきたいと考えております。

本展は当館の開館以来、初めて他の美術館と共同企画する展覧会です。いつもの上原美術館とは違った新しい雰囲気をお楽しみいただければと存じます。また、この展覧会に合わせて、静岡県立美術館との共同イベントも多数開催します。新緑が美しい伊豆への旅、そして両コレクションが織り成す「美」への旅をお楽しみいただければ幸いです。

それでは、ここから旅の一部をご紹介します。

### 第1部「旅のはじまり、伊豆」 仏教館

美をめぐる旅は伊豆からはじまります。はじめに、上原美術館に隣接する向陽寺に伝わった平安時代の阿弥陀如来坐像(上原美術館、以下UM、fig.1)が穏やかな佇まいで皆様をお迎えます。そうした柔らかな伊豆の空気は、下田を描いた牛島憲之《雨明かる》(UM)にも共通して見ることができます。大和絵や琳派の壮麗さを近代に甦らせた下田出身の画家・中村岳陵による屏風絵《牡鹿啼く》(静岡県立美術館、以下SM)は伊豆・天城の深い山々をも想起させます。

静岡といえば富士。古くより富士の仏として信仰された《大日如来坐像》(UM)には日本人の霊峰への思いを見ることができます。また《富士三保松原図屏風》(SM)や梅原龍三郎《富士》(UM)は、富士山がいかに日本人に愛されてきたかを教えてくれます。

国内で愛される一方、美しい山の姿は国外にも影響を与えます。浮世絵に登場する富士に魅せられたモネは、北欧の雪山を富士山に見立てて、《雪中の家とコルサース山》(UM)を描きました。伊豆、そして静岡の風景が世界へと繋がっていきます。

この展示室で大きな存在感を放つのが、アメリカ抽象表現主義の画家モーリス・ルイスによる《ベス・アイン》(SM、fig.2)です。横3メートルを超える大画面は、伊豆と静岡の風景の中であって、時を超えた壮大な旅へ、見るものをいざないます。

### 第2部「はるかなる旅 印象派からゴーギャン、マティスへ」 近代館 第1展示室

ピサロ、モネ、ルノワール、シニャック、ゴーギャン。上原

美術館と静岡県立美術館には印象派をはじめとする幾つもの美しい風景画があります。第1部で東西を繋いだモネの油彩画に続いて、モネ《ルーアンのセーヌ川》(SM)、《薫ぶき屋根の家》(UM)が近代館の展示室を飾ります。モネが自然をとらえる近代的なまなざしは、ルノワール《アルジャントゥイユの橋》(UM、fig.3)をはじめ、シスレー、セザンヌらの絵画にも見ることができます。

上原美術館の特徴の一つに初期作品が多いことが挙げられます。ゴーギャンの最初期の油彩画《森の中、サン=クルー》(UM)と、画家の代表作の一つ《家畜番の少女》(SM、fig.4)が並ぶ展示は、本展のみどころの一つです。さらにシニャック《アニエール、洗濯船》(UM)には19歳の画家による瑞々しい感性を見ることができます。続くマティス、マルケ、ポナール、ドランの華やかな風景は、見るものをはるかな旅にさそいます。

そして、クールベ《ピュイ・ノワールの溪流》(SM)における力強い自然描写は、上原コレクションでは見ることができない、風景表現の多様性を知ることができます。展示室中央には、風景を巡る旅を楽しむようにロダン《永遠の休息の精》のトルソ(SM、fig.5)が佇みます。

### 第3部「内なる世界へ」 近代館 第2、3展示室

上原コレクションの特徴の一つである須田国太郎。その代表作《筆石村》(SM)は見るものを内なる世界へといざないます。その特徴はレンブラント《三本の木》(SM)の静かな画面にも共通するといえるでしょう。さらにルドン《ダンテとベアトリーチェ》(UM)が文学の世界へと導きます。ロダン《考

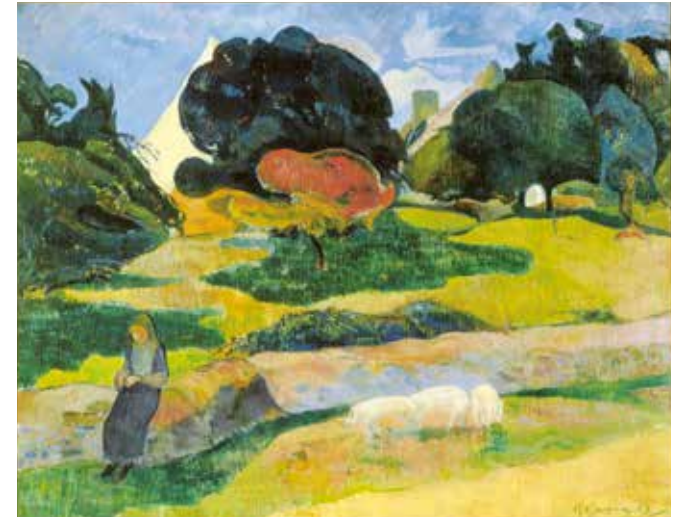


fig.4 ポール・ゴーギャン《家畜番の少女》1889年 静岡県立美術館蔵

える人》(SM)は同じダンテ『神曲』に登場する地獄の門を飾るモチーフの一つです。内省的なルドン《読書の女》(UM)と、平安時代《古今和歌集巻第一断簡(亀山切)》(SM)の仮名文字は、時代も場所も異なりますが、文字を通じて揺れ動く心が響き合います。ゴッホの初期作品《鎌で刈る人(ミレーによる)》(UM)と、彼が憧れたミレーの版画との競演は、わずか10年に過ぎないゴッホ芸術の源泉へと遡る旅のようです。

第3展示室では、岡鹿之助や香月泰男の花の絵画を、平安時代の写経や興福寺千体観音に献花するように展示します。写経を彩る宝相華文(ほうそうげもん)は速水御舟《芍薬図》(SM)と不思議な呼応を見せます。旅の最後には、上原コレクションのはじまりであるドランの小品《裸婦》(UM)に辿りつきます。(土森)



fig.1 《阿弥陀如来坐像》平安時代 上原美術館寄託



fig.2 モーリス・ルイス《ベス・アイン》1958年 静岡県立美術館蔵



fig.3 オーギュスト・ルノワール《アルジャントゥイユの橋》1873年 上原美術館蔵



fig.5 オーギュスト・ロダン《永遠の休息の精》のトルソ 1899年以降? 静岡県立美術館蔵



昨年11月に生まれ変わった上原美術館・仏教館。天井から光が降り注ぐホワイエという小部屋の中央に立ち、来館者をお迎えするのが、今回ご紹介する観世音菩薩立像です。

像高36.1cm、ヒノキと思われる針葉樹の一木造。穏やかな表情、着衣の衣文を略し、撫で肩で体躯が薄く、温和な作風などから、平安後期、12世紀の仏像と考えられます。お客様をご案内した時の一番人気为本像で、小像ながら、穏やかで温和な姿に癒される方が多いようです。

両手とも親指と中指で輪をつくり、左手を上げ、右手は下していますが、両手は体に比して小さく、動きもぎこちなくてやや不自然な印象です。

次に着衣を見ると、両肩から天衣という布をかけています。垂れ下がった

天衣は下半身に優美な二つのU字型の曲線を作っていますが、肩から垂下する天衣をたどると、向かって右の天衣の裾が腰にさしかかる位置で途切れており、それとは別の現在の天衣が腋の下から現れます。次いで左を観察すると、現在の天衣の下に古い天衣の痕跡。このことから、現在の天衣は、当初の天衣が欠損したため、新たに補ったものであることが分かります。上のU字型の天衣の一部が欠けているのは、補った部分を古く見せるための細工なのです。実は先ほどの不自然な両手も修理によるもので、他作例から考えると、本来は、左手に未敷蓮華(蕾の蓮華)を持ち、右手で蕾の花弁を開くさまをあらわしていたようです。また、両足先と台座も後補。完全な姿に見えながら、多くの部分を失っていることが判明しま

したが、何故本像は破損しているのでしょうか。

実は本像は、興福寺千体観音(興福寺千体仏)と呼ばれる像の一体で、奈良の興福寺に伝来したと言われていました。伝承では、興福寺に千体観音を安置するお堂がありましたが、江戸時代にこの堂が荒廃、観音像は朽ちるに任された状態で近代を迎えました。こうしてほぼ全ての像が両手や両足先を失い、中には風呂の薪として燃やされたものもあったそうです。このような状況にあった明治の末年、三井財閥総帥で「千利休以来の大茶人」と称された益田孝(益田鈍翁)が破損仏七十七体を興福寺から買ったと言われていました。現存する興福寺千体観音はこうして流出したといいますが、益田孝以外にも買った人が複数いたらしく、多数の観音像が、現在、全国各地の美術館・博物館、個人に分蔵されています。破損の痕跡を隠し、穏やかに立ち続ける本像の背後にはこうした歴史があったのです。

2012年に当館が行った調査で、伊豆市・修禅寺からも興福寺千体観音の一体が見出されました。修禅寺像は像高37.5cm。大きさは上原美術館像とほぼ同じですが、上原像に比べてすっきりとスタイルが良く、金箔が残っています。修禅寺像も両手・両足先・台座を補っており、天衣は失われたままです。上原美術館像同様、この像も苦難と流転の歴史を経てきたのです。上原美術館の像は5月20日まで、修禅寺像は修禅寺宝物館で常時拝観できます(8時30分～16時、大人300円)。早春の日、二体の愛らしい観音像を訪ねられてはいかがでしょうか。



《観世音菩薩立像(興福寺千体観音)》  
平安時代 上原美術館蔵



《観世音菩薩立像(興福寺千体観音)》  
平安時代 修禅寺蔵

上原美術館の絵画コレクションは、大正製薬株式会社の名誉会長・上原昭二(1927年-)が蒐集した絵画の寄付にはじまります。それらはもともと家に飾っていたため、小さくとも親しみやすいのが特徴です。

アンドレ・ドランの《裸婦》は上原が30代後半で初めて購入した油彩画です。読書が好きだった上原は学生時代に美学を志しますが戦争の影響もあって断念し、父が勤める会社に入社します。そこで古美術好きの先輩とともにお店巡りを始め、この小さな裸婦に出会います。当時、この絵の良さがあまり分からなかったといいますが、信頼する画商の勧めで貯金をはたいてこの油彩画を購入しました。

当時上原は両親の正吉・小枝夫妻と同居していました。そのとき、「父からいつも相応の態度を取るように厳しく言われていた。絵を買うなんてとんでもない、と言われると思った」(上原昭二『あせらず無理せず背伸びせず』1997年、享有堂印刷所、204頁)ため、この作品を押し入れに隠して、ひそかに眺めていました。

手元で眺めるうちにいつの間にか魅了され、「足長お嬢さん」と名付けて大切にしました。この絵を壁に飾ったの

は自邸を建ててからのことです。初めて寝室の枕元に飾った時には「やっとこの絵を持つのにふさわしくなったような気がしてうれしかった」(同上書)といます。

こうしてはじまったコレクションは上原が古希のときには100点以上となり、それらを寄付することを決意します。そして2000年春、上原近代美術館が誕生しました。

時は流れて2015年、一つの作品が美術館に寄贈されました。アンリ・ルソーの小さな油彩画《両親》です。この作品も手に収まるような小品で、どこかドランの《裸婦》に似た優しい佇まいがあります。

《両親》はルソーが60代で描いた作品。描かれた二人は若く澆刺としており、両親の思い出を描いたものと思われる。その優しい表情には画家の愛情が溢れるようです。少し歪んだ小さな額も、どこか気取らない愛らしさを見せます。

この油彩画は画家・藤田嗣治が旧蔵した作品です。藤田はこの作品をパリの自宅に飾っていました。そこを訪ねた中河與一は次のように回想しています。「二階にあがると、屏風がたててあり、その南に應接間があった。そのレ

ングのマントル・ピースの上には藤田の敵父の写真が立ててあり、アンリ・ルソー筆の油のルソーの両親の絵とライオンの首の絵、(中略)などがかかっていた」(『真珠』第19号、1964年、32頁)。その述懐から藤田が《両親》を父の写真と並べ大切にしていたことが分かります。本作は藤田の没後、藤田夫人が所蔵していましたが、その後、上原のもとに渡りました。

上原はこの作品を米寿の記念に美術館へ寄付します。伊豆・下田は母の故郷であり、両親が晩年を過ごした地、そして美術館の隣には両親の菩提寺があります。この小さな油彩画には、米寿を迎えた上原の両親への思いが込められているといえるでしょう。

上原が押し入れに隠したドランの《裸婦》と、米寿で美術館に寄付したルソー《両親》。二つの作品が出会うまで半世紀の時があります。現在の展覧会では、この二つが同じ部屋に展示されています。その周囲に飾られた印象派の名画を見ると、半世紀の間に豊かな時間が流れていたことを感じさせます。そして、そこにはいつも両親への温かい愛情があったことが垣間見えます。個人コレクションには、コレクターの人生やまなざしを味わう楽しみもあります。



アンドレ・ドランの《裸婦》1929年 油彩・カンヴァス 34.0×21.0 cm



アンリ・ルソー《両親》1909年 油彩・板 17.0×20.5 cm



## 美を旅する — 静岡県立美術館のコレクションとともに — 関連イベント

「美を旅する」展の期間中、静岡県立美術館と上原美術館がコラボレーションして、様々なイベントを開催します。下田で静岡県立美術館と共同イベントが行われるまたない機会です。5月19日、20日には下田市黒船祭も開催されます。新緑が美しい初夏の下田で様々なイベントをお楽しみください。以下のイベントは全て参加費無料です。 ※写真はイメージです

### 講演・座談会「伊豆をめぐる。美術館をたのしむ」

静岡県立美術館館長木下直之氏と上原美術館の学芸員がお話をします。

日時 2018年4月30日(月祝) 13:30～15:00

場所 下田市民文化会館小ホール 定員 150名 \*要予約

### 「学芸員によるギャラリートーク」

仏教館と近代館の作品を学芸員が解説します。

日時 会期中の毎週土曜日14:00～ \*仏教館25分/近代館25分

集合場所 上原美術館 仏教館 定員 先着20名 \*予約不要/要入館券

### 「ねんど開放日/えのぐ開放日」

たくさんの粘土や絵具で自由に遊ぼう！

①ねんど開放日 5月5日(土祝)、19日(土) 11:00～、14:00～

②えのぐ開放日 5月20日(日) 11:00～、14:00～

\*5月19日、20日は黒船祭の協賛イベントです

場所 道の駅 開国下田みなと

対象 3歳以上の方 \*親子で参加して、活動や会話を楽しんでください。

定員 各回50名 \*予約不要

持ちもの 服装 タオル、汚れてもいい服(はだしで活動します)

\*直接会場にお越しください。

定員を超えた場合は入場できませんのであらかじめご了承ください。

### 「みんなで大きな黒い船を描こう！」

みんなで大きなモネ《ルーアンのセーヌ川》を描きます。

日時 5月4日(金祝) 10:00～16:30 場所 道の駅 開国下田みなと

対象 どなたでも \*要予約

### 「仏像デッサン会」

仏像ギャラリーで仏像をデッサンしよう！

日時 4月22日(日)、5月11日(金) 10:00～16:00

場所 上原美術館 仏教館 仏像ギャラリー(旧・大正殿)

対象 中学生以上

定員 15名 \*要予約/要入館券 持ちもの 鉛筆、練りゴム

その他 イーゼル、椅子、カルトンは美術館より貸出します。

各自、自由に制作するデッサン会です。

### 「ちょこっと版画体験」

銅版画の印刷体験。展示作品をもとにしたオリジナル絵ハガキを作ろう！

日時 5月6日(日) 開館中いつでも \*所要約15分

場所 上原美術館 近代館 会議室 対象 どなたでも

定員 先着100名程度 \*予約不要



## 活動報告

2017年11月3日のリニューアル・オープン後には、たくさんのお客様にご来館いただき、1月末までの3ヶ月に6,000名以上の方においでいただきました。また、当館の教育活動も、多くご利用いただいております。今後も地域文化に貢献できるよう努めてまいります。

### 講演会「下田は東西の美術が出あう町 — 上原美術館のたのしみ方 —」

会場：下田市民文化会館 大ホール 講師：山田五郎氏

日時：2017年12月2日(土) 13:30-15:00 参加人数：800名

上原美術館のリニューアル記念として、山田五郎さんをお招きして講演会を開催、当館収蔵品を中心に東西の絵画の魅力をお話いただきました。ユーモア溢れる独特の切り口に会場からは笑いや驚きの声が上がっていました。



### 授業入館

2017年11月10日稲梓小学校19名/11月17日浜崎小学校PTA15名/12月9日下田書道教室13名/2018年1月19日下田東中学校26名/1月26日下田認定こども園53名/2月9日稲生沢中学校34名



### 出張授業

2017年10月2日朝日小学校(仏教美術)/11月9日稲梓小学校(絵画鑑賞)/12月6日浜崎小学校(絵画鑑賞)51名/2018年1月11・18日東京富士見中学校(仏教美術)/1月22・24日稲取高校/2月8・16日下田中学校/2月9日下田高校(社会人講話)



### 知事来館

2018年2月6日、移動知事室の一環として、川勝平太静岡県知事が来館されました。川勝知事は文化芸術に造詣が深く、東西の近代絵画や、平安時代から続く伊豆の古い仏教文化について質問を交えながら鑑賞されました。



### 平成30(2018)年度 教室受講生募集

上原美術館では平成30年度の教室受講生を募集しています。

仏像彫刻教室	講師 岩松拾文先生/大谷文進先生(仏像彫刻家)	日時 毎月第3日曜日 13時～15時30分
写経教室	講師 山田修也先生(書家)	日時 毎月第2日曜日 13時～15時30分
日本画教室	講師 牧野伸英先生(日本画家、日本美術院特待)	日時 毎月第2、4火曜日 13時～16時
デッサン・水彩画教室	講師 小野憲一先生(現代美術作家)	日時 毎月第2、4水曜日 13時～16時

会場 上原美術館(近代館)会議室 受講料 無料(用材、写生会の施設入場料等は実費負担)

募集人数 若干名(応募者多数の場合は抽選) 受講条件 全日程に参加できる方、ご自分で通える方(お1人1教室のみ応募可)※初心者歓迎

応募方法 郵便はがきに氏名、年齢、住所、電話番号、ご希望の教室名、経験の有無を明記の上、郵送にて2018年3月10日(必着)までにご応募下さい。美術館受付でもお受けいたします。なお、応募結果は3月15日頃、応募者全員に郵送で通知します。

お申し込み先 〒413-0715 静岡県下田市宇土金341 上原美術館「教室募集」係



**無料送迎バス** 5月4日、5日、19日、20日は、上原美術館-伊豆急下田駅-開国下田みなとをつなぐ無料送迎バスを運行します。

**要予約イベントの申込方法** はがき、またはメール(info@uehara-museum.or.jp)で氏名、住所、電話番号、参加希望イベントを記入し、上原美術館までお申し込み下さい。



美術館前の達磨大師では2月3日に節分祭が開催されました。いよいよ春も近づいておりますが、今年は寒さが厳しかったため近代館中庭の枝垂れ梅は2月末になり、ようやく開花しました(写真)。

2月10日から3月10日まで河津にて「河津桜まつり」、南伊豆にて「みなみの桜と菜の花まつり」が開催されます。今年は開花が遅いため、長く桜を楽しめそうです。

5月19日、20日は下田市で黒船祭が開催されます。5月19日と20日に道の駅開国下田みなと(旧・ベイステージ下田)で開催する当館のワークショップは黒船祭との協賛イベントとなります。当日は美術館と駅、ワークショップ会場を結ぶ無料送迎バスも運行予定です。美しい花と新緑の伊豆にどうぞおいでください。



### 古筆、古写経の魅力

伊豆から遠く離れた千葉県の成田山書道美術館では、新春特別展『青鳥居清賞—松崎コレクションの古筆と古写経—』(1月1日～4月22日)が開催されています。これは松崎春川氏とそのご令息の松崎中正氏、親子二代に渡る壮大な古筆、古写経のコレクション展です。今も昔も書を楽しむ人たちは、古筆や古写経の一部分を台紙に貼りこみ、手鑑という文字のアルバムにして愛好していますが、この特別展にも二件の手鑑が出品されています。仮名文字のたおやかな線や、古写経の力強く書かれたものなど、それぞれの作品は見る者を惹きつけてやみません。これだけの名品が揃うことは滅多になく、美しい文字の世界を堪能できる展覧会です。(櫻井)



### 二つのルドン展

ルドンは近年、新しい研究が飛躍的に進んでいますが、今年は日本でも大きな展覧会が二つ開催されます。三菱一号館美術館では現在、開催中『ルドン—秘密の花園』(2月8日～5月20日)が開催中です。ルドンの植物をテーマにした世界初の展覧会で、10年の準備期間を要したという大規模な展覧会です。同館はルドンの美しい大装飾画《グランブーケ》を所蔵しますが、この作品はフランスのドムシー城に秘蔵された16点の装飾画の一つです。今回の展覧会ではオルセー美術館が所蔵する他15点と合わせて、全装飾画が一堂に会します。世界の名だたる美術館から集められた美しい絵画は新たなルドン像を提示しています。

もう一つの展覧会が今夏よりポーラ美術館にて開催される『ルドン ひらかれた夢：幻想の世紀末から現代へ』(7月22日～12月2日)です。近年公開された手記や手紙などの新資料をもとに幻想神話を再考する試みです。当館からもルドン《ダンテとベアトリーチェ》などを出品する予定です。(土森)

次回休館日は2018年4月9日(月)～4月13日(金)です(展示替えのため)



上原美術館  
Uehara Museum of Art

開館時間  
9:00～17:00  
最終入館は16:30まで

休館日  
展覧会会期中は無休  
展示替え日のみ休館

入館料  
大人/1,000円、学生/500円  
高校生以下無料 \*団体10名以上は10%割引